

この世には男と女がいる。最近は見かけも中身もどちらか分からない人種が出現しているが、それはさておいて、難しいのが男と女の仲である。

一緒になる時は信仰心の有る無しにかかわらず神または仏に誓うもの。曰く

“Terapung sama hanyut, terendam sama basah.” (浮けば共に流れ、沈めば共に濡れよう)

“Mati bersama, hidup bersama.” (死ぬ時も一緒、生きるのも一緒)

“Cangkat sama didaki, lurah sama dituruni.” (岡を一緒に登り、谷は一緒に下ろう)

以上いずれも「喜びも悲しみも(いつも一緒)」という意味である。

生涯を Mati seladang.(1つの畑だけで死ぬ=生涯1人の奥さんだけで過ごす夫もたくさんいる。また、Bangkai(娼婦)に群がる Héring(男)もいる(前回参照)はたまた Telaga mencari timba.(池が柄杓を探す=男漁りをする女)もいる。

男は言う“Pecah anak buyung, temayan ada.”(1つの水源が枯れても、別の沸き水がある=女は1人ではない、妻にするのにいくらでも代わりはある)と。

一方、女は“Kumbang tidak seékor.”(雄蜂は1匹ではないよ=男は1人ではない、もっといい人が出てくるよ)と。さらには、女2人が1人の男を取り合ったり(Satu sangkar dua burung.=鳥かご1つに鳥2匹)もする。さらに凄いのには1人の女が恋人2人を手玉に取る(Keli dua, selubang.=魚は2匹、穴は1つ)さらに社会が許せば、1人の女が亭主を2人持つ(Pelesit dua sejintang.=バツが2匹、魔王の下に)ことも有るそう。

インドネシアの名曲 Sabda Alam(神の摂理)という歌の中には男と女の定めが歌われている。「男は強く、女は優しく可愛い。女は昔から男にちやほや

され鳥かごの中のハニーとされてきたが、所詮男は女の流し目にこりり(降参する)。

その昔日本のある天皇は小高い丘に登って下界の生活を見るのに、「民のかまどは賑わっているか」と炊事の煙が立ち昇っているかどうか確かめたという。今の政治家もそんな一言でも吐けば誉めてあげたいのだが…。米食民族万歳!インドネシア語でも同じ表現がある。ただし、現象は暗いのだが。Dapur tidak berasap.(かまどに火なし)は貧乏そのものをいう。同じ意味に Kain basah kering di pinggang.(濡れた着物を腰で乾かす=着替えが無いので着たまま乾かす)という表現も有る。

しかし、向こうの気候なら貧乏ならずとも、熱帯式水洗トイレの後 Celana basah kering di pinggang.(ズボンが濡れても、そのまま乾かしちゃえ)で十分OKだよ。

昔から日本語っておかしいなと思っている表現に「踏んだり蹴ったり」という言葉がある。普通、そのような目にあうのは「踏まれたり、蹴られたり」する方なのだが、何故か加害者の行為が使われるんだよね。

インドネシア語では“Bajak patah banting terambau.”(鋤は折れ、牛はつまづく)という。似た表現に「泣き面に蜂」というのが有る。“Antan patah, lesung hilang.”(杵は折れるし、臼はなくなる=不幸が次々と来る)とか“Sudah basah kehujanan.”(もう濡れてるのに、また雨に降られる)とか“Sudah jatuh tertimpa tangga pula.”(落ちたその上にハシゴまで倒れ掛かる)。

「天に向かって唾を吐く」その結果はいうまでも無いというのが日本語。インドネシアではもっと丁寧だ。“Meludah ke langit, kena muka sendiri juga.”(天に向かって唾をはけば、自分自身の顔にかかる)と物理の法則に則った結果まで教えてくれる。